
ギルドの物語

たか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギルドの物語

【コード】

N0060T

【作者名】

たか

【あらすじ】

一人の少年が入ったギルド、ここから新しい物語が始まる

更新停止

設定

名前 スカイ・マーベル

一応ウエンデイの兄 年齢はグレイの2つ下：16歳

幼いころ妹とはぐれ、通りすがりのジェラルドと名乗る人にまかせた。

ドラゴンに育ててもらったが名前不詳 その竜は竜の中心のドラゴン
ドラゴンは7月7日に消えてしまった

好きな人物は ウエンデイ、ミストガン、ロラ、?? 物は 杖

嫌いなものは 軽すぎるもの、重すぎるもの 趣味は読書

魔法は重力、^{グラビティ}滅竜魔法は属性すべてを使える祖竜。

大好きな食べ物は雷。 主に使っている滅竜魔法は闇の滅竜魔法
爆砕竜と雷竜の滅竜魔法で魔砲を放てる。

ドラゴンフォース状態で、全魔力を出せばエーテリオン相殺レベル。
4分の1の魔力でジユピターを相殺できる。 いつもだと半分消費する。

ドラゴンフォース切り替え可能。 雷を食べればいつもの3倍魔力が
上がる。 他は2倍

受け止めなくては、食べられないのが欠点。 止まってるのなら普通に
食べられる

治癒魔法などもつかえ、おもにサポートをする

まあチートです。

髪は青色でジェラルドみたいな髪型、ギルドのマークは手のひらに
ある。 色は青

性格は誰にでも優しく仲間想い、恋愛に関してはすごく鈍感、ほか
は鋭い

ミストガンが持っているような杖と19巻に載っている槍を換装で

きる。

名前 ロラ

名前の由来、オーロラがプラズマでできている

とどこかで聞いていてこれでもいいよなということのでつけた名前。

喋った後に体に雷が走るのが特徴・・にします。

魔法は、翼^{エーラ}、雷の魔法

体の色は黄色

尻尾の先にギルドのマーク。色は黄色

好きなもの 魚、スカイが読んてる本

嫌いなもの 電気を通さないもの

今後キャラを増やす予定

一話 始まりの始まり（前書き）

駄作ですそれでもいいかたは見ていってください

一話 始まりの始まり

「ここかな」

僕はあるギルドを訪ねた

「すみませーん」

「ん？誰じゃ？」

老人が尋ねてくる

「あなたがマスターマカロフですか？」

「そうじゃがおぬしは・・・？」

「先日手紙を出させていたただいたものです」

「そうか！おぬしじゃったか、これからよろしくたのむ」

「よろしく願います」

「さっそくじゃがギルドのガキ共に合わそう」

ギルドの中はすごく騒がしい

「いつもこうなんですか？」

「うむ・・・」

「ガキ共、話を聞け！」

「なんだよじっちゃん」

「じゃますんなよ」

喧嘩している二人が言った。上からナツ グレイだ、どちらとも魔道師である。

「うむ、新しい仲間が増えた。ほら、あいさつせい」

僕は自己紹介をする。

「はじめまして、スカイ・マーベルです。今日からよろしくお願ひします。」

僕は頭をぺこりと下げた。 次の瞬間

「」「よろしくー」「」「」

すごい歓声で迎えられた。

二話 初めての戦闘

「よお新入りお前強いのか？」

言ってきたのはナツだった

「弱いよ？戦ったことないし」

「じゃあ初めての相手は俺だ！」

「ナツ待て、俺が先だ！」

グレイが割り込んできた。なんで裸・・・？

「グレイ、服」

「あゝ！！！」

近くの女の子が注意した。

「わたしはカナ、よろしく」

「こちらこそ」

「あいさつは後だ！、相手しろー！」

ギルドの外。

いきなり戦うことになった。

「手加減しねーぞ、スカイ」

「手加減してくれよ・・・」

「じゃー初め」

なぜマスターが合図を？

「オラー！」

ナツがいきなり火を纏い向かってきた。

「火竜の鉄拳！」

僕はそれを難なくかわす

あれ？こんなに遅いんだ・・・楽だな

「反撃だ！」

ナツの腹に一撃殴ってやった

「ゲハツ！？つ、強え」

「こうなったら・・・火竜の咆哮！」

思い切り息を吸い込んで炎を吐き出す。炎が迫ってくる。

耐えられるかな？まともに受けてみた。

「あつ耐えれた。」

「なーにー！？」

ナツは驚いている一番の技を耐えられたのだから。

「グラビティ」

対象をナツに向けた、するとナツはうつ伏せになった。

「これで勝ちはだめ？」

僕はマスターを見た

「勝者スカイ」

マスターが言った。

あたりがシーンとしていた。

二話 初めての戦闘（後書き）

中途半端ですいません

三話 さいきょうの二人

戦いが終わって数日後 ギルドにもだいぶ打ち解けてきた
今はいつも通りナツとグレイの喧嘩を見物している。
よくけんかするなあと思っっていると

「ただいま帰った。・・・ナツとグレイなにをしている？」

「「エツエルザ・・・」

「カナ、あの子は・・・？」

「あれはエルザだよ、このギルド最強の女だよ」

確かにすごい威圧感だな・・・

「君は？」

エルザが話しかけてきた。

「あつ僕はスカイ・マーベルと言います。よろしくお願いします」

「そうか、私はエルザ、エルザ・スカーレットだ、よろしく頼む」

ナツとグレイが新たに喧嘩していた。

「やめんか二人とも！」

すると入口から別の声がした。

「エルザ、前の続きだ！」

今度は誰だよ・・・にしてもエルザに喧嘩売るのはすごいなあ

「ミラねえ帰ってきたばっかりだよ？」

ミラとリサーナとエルフマンが帰ってきた。

一応エルザと同じように挨拶をした。

カナ曰くミラは最凶の女らしい

すると 그레이 が

「スカイ、あいつらこらしめねえか」と言ってきた

それが聞こえたらしくエルザとミラが怒っていた

結局戦う羽目にあった。

周りから 気の毒に という声 が聞こえる

エルザは黒羽の鎧でミラはサタンソウルで向かってくる。

「オラアアアアア！」

面倒なので最初から魔法を使った

「グラビティ」二人はうつ伏せになった。

僕は槍を換装して

「はいおしまい」といった

ミラは負けず嫌いだったようで

「もう一度!」と言ってきたが眠かったので

「また今度ね」と言ったら

「ちよまてっ!」と言っていたが

無視してギルドに入って行った。

三話 さいきょうの二人(後書き)

幼少期はこれでおわりかな？

四話 卵(前書き)

駄作すぎますね、すいません。

まだまだ新米なのでこれからもよろしくお願いします。

四話 卵

あれから月日がたち、いろんな人と出会った。

まずはラクサス。

ギルドのものからスカイが強いと聞いていたようで、会ってすぐに「勝負しろ」と言っていた。

ラクサスが強いということは聞いていたため、魔法を見たかった。見たところ電気、雷ではないのが残念だった。グラビティですぐに倒せた。

それから毎日勝負を挑んできた。しつこいので一度足を動けなくした、その時は怯えていたようにマスターが驚いていた。ラクサスが怯えることは初めてらしい。

次にギルダーツ、S級魔道師でありフェアリーテイル最強の人。ナツとは仲が良いみたいだった。

ミストガンにも出会った。会った瞬間誰かわかっていた。魔力がないからだ。しかし来ているときはみんなを眠らせている。顔を見られたくないようだ。

その後、町はずれの森でナツの滅竜魔法を見せてもらっている。

「火竜の鉄拳！」

ナツが木を強く殴ったとき、その木から二つ謎の卵が落ちてきた。

「なんだこれ？」ナツが言った

「わからない、とりあえず持ちかえろっよ」

ギルドに帰ってナツが孵化させてくれとか言っていた。
マスターは命を冒洩するな愛情を注げ、など言っ
て卵をナツは育てることにしたようだ

「僕はどうしようかな・・・」

「私が手伝ってあげる」言ってきたのはミラだった。

それから僕はミラと卵を育て始めた

四話 卵（後書き）

幼少期まだ続きます

五話 猫（前書き）

駄作です

五話 猫

僕はミラと卵を育てることにした。

しかし仕事があるのでミラと一緒にクエストに行った。

「依頼は洞窟の調査だな」

「広くなければ早く終わるね」

そう言っつて洞窟に入っつて行つた。

「意外と深いわねえ」

「けど一本道だし」

「あつ大きい広間だよ」

「ここが最深部かな・・・ん？なんだ？」

上からなにか落ちてきた。

ドシーン

「うわっ」

「キヤッ」

どつやら岩？が落ちてきたようだ。しばらくすると急に岩が動き始めた

「なんだ!？」

「なにこいつ・・・」

それはストーンタートルだった。亀だが魔物、一撃が山の4分の1崩すくらい強いという

「どうやって倒すんだよ・・・」

「スカイ逃げよ！」

「いや・・・倒すよ」

亀が襲いかかってきた。

「グラビティ！」グラビティは重力を変える魔法なので亀にかかる重力を軽くした。

少しずつおろしてくる足をどうしようか悩んでいる。

「（滅竜魔法使おうか・・・）」

「闇竜の咆哮！」

「!?!?」

亀は砕け散りミラは驚いていた。破片が卵に当たったかと思うと、突然卵が光りだし中から猫が出てきた。

「「ねこ?」「同時に言ってしまった。」

「うん、僕はねこだよ」

「猫がしゃべったよスカイ!?!?」

「落ちつけよミラ、ところで君の名前は?」

「知らないよ、出てきたばかりだもん」

「あと・・・そのビリビリしてるのは?」

ねこはバチツという何かを纏っている。

「これは雷だよ〜ついでに翼はエーラて言っただよ」
「ねこ?と言ったのは翼が生えていたからだ。」

「名前無いならつけなきゃね、スカイどうする？」

「ロラとかどうだ？」

「僕はこれからロラだね！」

ねこは僕の右肩に乗った。依頼を達成してそのまま帰った。

ギルドに帰ってきて

ナツ&リサーナの卵が孵化したところだった

「あい！」

リサーナがかわいいというとみんなが後に続いた
幸せということでハッピーと名付けられた。

ロラはハッピーのところへ飛んで行き

「あい！」

「？」バチッ

その一日は楽しいものだった。

五話 猫（後書き）

何か問題があったら教えてください。

六話 ナツとルーシィ（前書き）

原作回

六話 ナツとルーシ

Sidellushi

「え、この町って魔法屋一軒しかないのお？」

「ええ、もともと魔法より漁業が盛んな街ですからね。町のものも魔法を使えるのは一割もいませんで」

「この店も旅の魔道師専門ですわ。」

「はあー無駄足だったかしらねえ」

「まあ、そう言わずに見ていってくださいや」

「あ！白い子犬ホワイトバギー！」

「そんなの全然強力じゃないよ。」

「いいのいいの探してたんだー、いくらー」

「20000ジュエル」

「お・い・く・ら・か・し・ら？」

「だから20000ジュエル」

「本当はおいくらかしら素敵なおじさま。」

私はウインクしながら交渉した。

「ちえ、10000ジュエルしかまけてくれなかった。」

「私の色気はたった10000ジュエルかあ!？」

そこに賑やかな声が聞こえてきた。

「有名な魔道師が来てるんですつてえ」

「サラマンドー様よ」

「(ああ何このドキドキはあちょっと私ってばどうしちゃったのよ
ー)」

「イグニール。イグニール!・・・誰だお前」

「サラマンダーと言えればわかるかねえ…って帰るのはやあ」

side out

side ナツ

いきなり女の集団に暴行を受けた…なんでだよ!

サラマンダーが話しかけてきた。

「僕のサインだ友達に自慢するといい。」

「いらん。」

そう答えた後にまた女の集団に暴行を受けた

「人違いだったね」

こいつはハッピーで俺の相棒だ

「さて、僕、この先の港に用があるのでこれで」

男はパーティがあるとか言っでどこかへいった

「何だ、あいつは?」

「ほんと、いけすかないわよね。」

「?」

「ありがとね」

金髪の女がいきなり礼を言ってきた

場所はレストランに移り

「私ルーシィよろしくね」「あい！」

「あはは、ナツとハッピーだっけ」

「あんたいい人だな。」

「わかったからゆっくり食べなつて、なんか飛んできてるから」

「で、サラマンダーって男、魅了^{チャーム}っていう魔法使ってたの」

「こつ見えても私魔道師なんだあ」「おおっ」

「まだギルドには入ってないんだけどね」

「人気のあるギルドは入るのも厳しいらしいのねえ」

「私の入りたいところはすごい魔道師がたくさんいてね入りたいけど

厳しいんだろうなあ」「いや」

魔道師の世界なんてわからないよねえとか言っただけで帰って行った。それにしてはよく喋ったな。

六話 ナツとルーシィ（後書き）

誤字があつたら教えてください

七話 フェアリーテイル（前書き）

すみません、本当にすみません
ボラさんカットさせていただきます

あと誰かは口調とかで判断してください。

駄作の域越えています

七話 フェアリーテイル

sideルシー

「ようこそ、フェアリーテイルへ」

ハッピーが歓迎してくれた。

「ただいまー!」「ただいまー!」

喋ったのはナツ、ハッピーの順番

「「おかえり〜」「」

「また派手にやらかしたなあ。ハルジオンの…ええ!?!」「てめえ
「!」

いきなりナツが中年男性を蹴りだした。

「なんでえ!?!」

「サラマンダーの情報、嘘じゃねえか!」

「そんなこと知るかよ、小耳に挟んだこと教えただけじゃねーか」
「んだとお」

「やんのかゴリア」

ナツと中年男性は喧嘩を始めた

「まあまあナツそれくらいでえええ」

ハッピーはピンボールのように飛ばされていく

「すごい、私ほんとにフェアリーテイルに来たんだ！」

「おお？ナツが帰ってきたってえ！？」

「この間のけりつけんぞナツ！」

「グレイ、服」

「ああ、しまった！」

「これだから品のない男どもは……」

「勝負しろや、ナツ！」

「服着てからこいよ」

「昼間つからピーピーギャーギャーガキじゃあるまいし」
「漢なら拳で語れ！」

連続してエルフマンが言った

「結局喧嘩なのね・・・」

「邪魔だ！」

「ひ〜」

「やだやだ騒々しいね」

ドンッ

「（カッチーン）混ぜってくるね。君たちのために」

「ていうか何なのよこれ、まともな人一人もいないじゃない」
「あら、新人さん？」

「み、ミラジエーン。本物!？」

「(ニコッ)」

side out

side 三人称

ガチャガチャ

ドンッ

バリーン

「あゝうるさい落ちていて酒も飲めやしない」

最初にカナ 「あんたらしい加減にしなさいよ」

次にグレイ 「あつたまきた」

続いてエルフマン 「おおおおお!!」

今度はロキ 「困った奴らだ」

最後にナツ 「かかってこいや!!」

あたりに魔法陣が展開された

「魔法でけんか!？」 「あい!」

「あいじゃな〜い」

「騒がしいね師匠」

「いつもと同じでナツたちだろ」

「僕もそう思う」バチッ

「それでも魔法は危険だな」

「どうするの？」

「とりあえず…ね」

外から誰かの声が聞こえた

「マジックエリア」

「あれ？魔法が使えねえ」

「この魔法は!？」

上からナツ、グレイ

「スカイ!帰ったのか!」

「今帰ってきたよ」

八話 スカイたち（前書き）

弟子の名前変える確率100%中30000%です。
リア友にヒント教えたら見つかってしまった…

では駄作ですが見てやってください

あ、書き方すこ〜〜〜く変えました。

八話 スカイたち

sideスカイ

「やっと帰ってこれたな」

「もう疲れたよ、顔出したらすぐ帰ろうよ」

「スカイはたぶんそのつもりだよ？ミオ」バチッ

久しぶりにギルドに帰って来ることができて、帰ってきたのは3ヶ月振りだろう。

3か月の間何していたかは、10年クエストに行っていた。今話しているのは、僕 弟子のミオ ロラだ。

ドシャーン！

ガシャーン！！

パリーン！！！！

「騒がしいね師匠」

「いつもと同じでナツたちだろ」

「僕もそう思う」バチッ

「それでも魔法は危険だな」

「どつするの？」

「とりあえず…ね」

そういった後、僕は魔法を唱えた。

「マジックエリア」

マジックエリアという魔法は魔法を使えなくする魔法。

僕の魔力より低い魔力の持ち主は魔法を使えない、という仕組み。欠点と言えば、その時に魔力を大幅に消費すること。

「あれ？魔法が使えねえ」

「この魔法は!？」

「スカイ!帰ったのか!」

「今帰ってきたよ」

そう言つてギルドに入つて行つた。

知らない人もいたけれど新人だろうか？所持品は…鞭？

「ただいま」

「ただいま」

「ただいま。」バチッ

「『おかえりー』」

ギルドに入ってくるとグレイが近寄ってきた。

「スカイ無事だったのか、クエストはどうだった？」

「ん？グレイ、依頼は達成したよ。今からマスターに報告をするから」

僕はマスターのほうに向かった。

「今戻りました、マスター」

「おお、スカイか、クエストはどうじゃった？」

「達成しましたよ、1ヶ月のけがをしましたが」

「1ヶ月もか！？おぬしほどの魔道師がなぜ…」

「マスター、僕がサポートに回っているのを忘れましたか？」

「そうじゃった、おぬしはミオを育てているんだったな」

「師匠が怪我したのは、私がやられちゃったから・・・」

ミオは落ち込んでしまっていた

「気にすることはないさ、無事に生きているんだ」

「スカイのいうとおりだよ、気にしない、気にしない」バチッ

「うう、師匠、ロラありがとう…うえ〜ん」

ミオが泣き出してしまった

「まったく…ではマスター、僕は疲れましたので帰らせていただきます」

「うむ」

ギルドを後にしようとする

「勝負してけやコラー！」

ナツの手には魔法陣が展開していた。火竜の鉄拳だろうか

「まだ魔法といてないよ？」

「え？」

ナツの手には火が出ていなかった

「魔法なしで行ってやらう！」

「おいおい、素手で僕に勝ったことあったっけ？」

「今日こそ勝ってやるー！・・・オラー！！！」

「いきなりかよ」

「喰らえええウゲツ！？」

「またね」

ナツを地面にたたきつけて、僕たちは家に帰った。

そのころには、ミラなどに慰めてもらったミアが泣きやんでいた。

「師匠早く帰って休みましょう」

「そうだな、ロラ、僕たちを運べるか？」

「魚くれたら運べるよ」バチッ

「魚だったら安いもんだ、ちょっと待ってね…はい、魚」

「よ～しいくよ」バチッ

一瞬で魚を食べていたロラはすぐに飛んで行った。

家に帰ってから

「それにしてもまいったよね、帰りにドラゴンが出るなんて」

「あれはドラゴンだったんですか？私は気を失ってしまっ……」

「あれはドラゴンだったよね」バチッ

「白いドラゴンってなんの竜だよ、僕を見ていきなり襲ってきたんだ」

「え〜と、私は師匠に助けられたんですよね？ありがと〜ございませす」

「いや、足に1週間の怪我させてしまったら」

「でも師匠は……」

「もういいよミオ、もう治ったんだし、とりあえず休もう」

「早く休も！」バチッ

「はい」

二人と一匹は次の朝まで眠りについた。

八話 スカイたち（後書き）

アドバイス、感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0060t/>

ギルドの物語

2011年10月9日03時00分発行